

かわい・じゅんいち

1975年生まれ。静岡県出身。先天性の弱視があり、15歳で全盲となる。水泳で1992年バルセロナから2012年ロンドンまで6大会連続でパラリンピックに出場し、メダル21個（金5、銀9、銅7）を獲得した。障がい者アスリートらでつくる一般社団法人日本パラリンピアンズ協会会長、一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟会長を務める。独立行政法人日本スポーツ振興センター研究員。

河合 純一 行って楽しかったら続くので、行くまでの道のりを、ガチガチの正攻法でやらなくていいと僕は思っています。さまざま仕掛けがあつていいと思うんですよ。ルールをわかりやすくして認知度をあげる

組むこと、ですね。ロンドンパラリンピックの観客数はラグビーのワールドカップより多くて、サッカーのワールドカップに近づいています。東京でもそれを目指そうと。

—まず、実際に体験して認知してもう機会を日常からつくれないといけないですよね。



河合純一さん

増子 恵美 スポーツ協会に入るまでは、自分のことだけ考えていればよかつたのですが、今は広くいろいろな障

—むしろ変化球でのアプローチですね。増子さん、ご自身の使命や役割をどう感じておられますか？

—まずは、実際に体験して認知してもう機会を日常からつくれないといけないですね。

という対策もありますが、結局それはスポーツが好きな人や、自分たち身内でかき混ぜているだけです。スポーツに興味のない人こそ巻き込まないと、広がらない。

たとえば、男性への周知についていえば、パラリンピックの魅力をダイレクトに伝えずとも、「お父さんに連れて行つても子どもや奥さんに対してもう国のお金で啓発教材をつくって、人権が大事、パラリンピックが大切と熱く先鋭化して言うほど、逆に一般市民、国民は引いてしまって結局広まらない気がするんですよ。

河合 純一さん

—誰も取り残されず、ちゃんと地域で生きていけるような「文化」を、この機会につくっていけるといいます。お二人ともトップで活躍されてきたからこそ、そういう人たちへのまなざしをお持ちな

当らない。だから、私はあえてそ

こに目を向けて、身近な地域でス

ポーツができる環境をこの5年間で

目指したいです。

一人ひとりの福祉の向上、アクセシビリティやバリアフリーの向上で、まち全体が豊かになるとと思うのです。障がい者スポーツを、新たな文化として日本に恒久的に根づかせていかないと。

高齢者問題と同じで、自立できるはずの障がい者が自立できず社会の負担になることを避けるためにもです。格差というのは確実にあります。だからこそ、そこに目を向ける

増子 恵美 私は、デビューした1994年に2つの国際大会に出て、車椅子競技以外のさまざまな競技や、アジア・オセアニア地域の障がい者を初めて見ました。20年近く前のアジアを松葉杖代わりにしている選手もいました。私は車椅子になつて落ち込んでいましたが、世界のショッキングな障がい者の状況を見て、自分が代表になつて派遣され、いろいろ見聞するのは、地元福島にそれを伝えるためなのだと思ったのです。

必要があると感じています。「誰も取り残されず、ちゃんと地域で生きていけるような「文化」を、この機会につくっていけるといいます。お二人ともトップで活躍されてきたからこそ、そういう人たちへのまなざしをお持ちな

当らない。だから、私はあえてそ

こに目を向けて、身近な地域でス

ポーツができる環境をこの5年間で



増子恵美さん

必要があると感じています。

—誰も取り残されず、ちゃんと地域で生きていけるような「文化」を、この機会につくっていけるといいます。お二人ともトップで活躍されてきたからこそ、そういう人たちへのまなざしをお持ちな

当らない。だから、私はあえてそ

こに目を向けて、身近な地域でス

ポーツができる環境をこの5年間で

目指したいです。

河合 純一さん

—河合さんは、ご自身の使命や役割についてどう考えておられますか？

河合 仕事の立場でいえば、2020年に金メダルをとれる選手をたくさん増やすこと、世界中から来る選手たちにいい大会だつたと思ってもらえるように観客席を満員にする、そのためチケットを買って応援に行こうと思ってもらえるような体制づくりに取り

田舎ほど、障がいが重くて自分でできない人はスポーツはできないと思っています。でも、重

度でも水泳やボッチャなど、でき

るスポーツがあると伝えなきやと。それと、東京のように障がい者が就労できる環境も整備しなければと思いました。

今、福島は、たまたま日本代表で

ある私がいて、被災地ということでもいろいろな支援が受けられるけ

ど、秋田や山形などもう少し北に行くと、もっと難しい状況なんです。

だから、福島だけでなく東北にも波及していきたいと思います。

河合 行って楽しかったら続くので、行くまでの道のりを、ガチガチの正攻法でやらなくていいと僕は思っています。さまざま仕掛けがあつていいと思うんですよ。ルールをわかりやすくして認知度をあげる

—むしろ変化球でのアプローチですね。増子さん、ご自身の使命や役割をどう感じておられますか？

—まずは、実際に体験して認知してもう機会を日常からつくれないといけないですね。

河合 広報誌は2500部を年2回、病院、自治体、企業、体育協会、教育関連、県立高校全部に情報が行くようにしています。毎年続けると効果は少しずつあります。そういう泥臭い地道な仕事をしないと広まらないですね。

河合 8つの窓口あわせると、広報もものすごく大変でしょうね。

河合 純一さん

—河合さんは、ご自身の使命や役割をどう感じておられますか？

河合 仕事の立場でいえば、2020年に金メダルをとれる選手をたくさん増やすこと、世界中から来る選手たちにいい大会だつたと思ってもらえるように観客席を満員にする、そのためチケットを買って応援に行こうと思ってもらえるような体制づくりに取り

田舎ほど、障がいが重くて自分で

できない人はスポーツはできないと思っています。でも、重

度でも水泳やボッチャなど、でき

るスポーツがあると伝えなきやと。それと、東京のように障がい者が就労できる環境も整備しなければと思いました。

今、福島は、たまたま日本代表で

ある私がいて、被災地ということでいろいろな支援が受けられるけ

ど、秋田や山形などもう少し北に行くと、もっと難しい状況なんです。

だから、福島だけでなく東北にも波及していきたいと思います。

スポーツの競技を通して日常の素行が改善することってたくさんあるんです。特に知的障がいの場合、軽度であればあるほど良い方向に効果が現れるのでがんばる、その結果、自信がついて物事に積極的に取り組めるようになっていく。自分の人間としての価値が高まっていく。そして、特別支援学校を卒業した後に仕事をする、社会のなかでしっかりと生きていける力をつけることができることなのですが、子どもがスポーツを通して就労して社会の一員となる。

田舎に行くほど「障がいは大変だ！」となります。徐々に世界が広がって子どもを連れて買い物に行けるようになつたとか、小さな一步が踏み出せる環境を、スポーツを通じてつくりていきたいです。

—増子さん自身がいいロールモデルなのでしょうね。

増子 私自身、引きこもりだった時代からはじまつて、ここまで世界が広がつて、いろんな方に支援していただいて、今度は支援する側にまわ

A black and white photograph of a man from the chest up. He has dark hair and is wearing a dark suit jacket over a white shirt and a plaid tie. He is looking slightly to his left with a neutral expression.

A black and white profile photograph of a young woman with short, dark hair. She is wearing a light-colored, possibly white, top. The photo captures her from the chest up, showing her profile as she looks towards the left. The background is a plain, light-colored wall.

魅力を地域でそれぞれに感じながら、障がい者スポーツが広がつていいべきだと思います。

違いを尊重し、切り捨てず、そのなかで極限までチャレンジする、そこにフェアプレーの本質が見えるようになります。お二人を見ていて、希望が見えてきます。今日はありがとうございました！

—2020年にむけて、スポーツの魅力を地域でそれぞれに感じながら、障がい者スポーツが広がつていけばいいなと思います。

違いを尊重し、切り捨てず、そのなかで極限までチャレンジする、そこにフェアプレーの本質が見えるように思います。お二人を見ていると希望が見えきます。今日はありがとうございました！

テーマも大きいですよ。学校の教科の先生は免許が必要なのに、少年団、クラブ、部活動は、指導者に資格がいるないのは課題の一つです。

安心となります。

一だから響くんだと思うんですよ。
自分が出る、話すのが好きというの
は自分の自己実現で終わってしまう
けれど、「届けることが自分の使命だ
」というのがぐっときます。

河合 スポーツはいい面もあり、一方で、お金の問題、賭博、ドーピングなど、ネガティブな問題もかなり多く出でてきます。そういうなかで、どうやってスポーツの魅力を伝えていかねば、業自身いつも凶みます。

一小さいじのから思ひつかりハボーツをしてほしげですね。



――「あなたに届けたい」という思いを感じます。

の水泳チームの勢いはすごかつたで
すよね。あの時、河合君は時代の波
に乗り、その立場を活用して、全国
レベルのメディアで発信してくれま
した。成田真由美さんと。1998
年に長野大会が控えていましたが、
あそこから日本の障がい者スポーツ
は大きく転換しました。

メダルの力は大きいと実感した
し、河合君たちのスピーチを聞い
て、やはり自分でしっかりと勉強して
バラリンピアンとして応答できるよ
うにならねばと思いました。伝える
力が大きかったです。

昨日、スポーツコースがある高校で講演をしました。インターハイに向かって日々練習しながらも、今日は疲れた、だるいと一生懸命やらない場合と、3歳くらいの幼稚園児が無邪気に走り回って疲れて親御さんにおんぶされて帰るほどがんばった場合を考えると、3歳児のほうがずっと運動価値があると話しました。

結局、「早い、強い、すごい」がすべてじゃないと気づけるのがスポーツだと思うのです。パラリンピックは、持っている能力や機能を